
リンクス

川島陽一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンクス

【Nコード】

N3666W

【作者名】

川島陽一郎

【あらすじ】

山本幾馬は事件に巻き込まれ、その衝撃によって一時的に記憶を失っている。病院の集中治療室のベッドに意識なく横たわっている自分の姿を見て、幾馬はひどく混乱する。心臓にナイフを突き立てられそうになっているところを救ってくれたホームレスの山室の本当の姿は天使で、神様に幾馬を護るよう遣わされたのだという。しかし、幾馬の魂は体を離れかけており、この先長くないことを告げる。同時に、生と死のちがいは単に痛みを感じるかどうかでしかなく、その痛みによって何かを学び取ることこそが生きる真の目的だ

とほのめかした。幾馬は少しずつ記憶を取り戻し、自分が生を受けた理由を手繰っていく。

作業服を着た天使

気がつくのと、病院の治療室に立ち尽くしていた。どうしてそんなところに立っているのか、自分でも理解できず、立ち尽くしていると、看護師が一人近づいてきた。

「すみません」と声を掛けたが、看護師は目線を送ることすらなく、脇を通り過ぎていった。そこでもう一度同じように言葉を掛けたが、結果は変わらなかった。

彼女は、すぐそばのベッドに意識のなく横たわっている患者の世話を焼き始めた。顔の大半を覆う包帯を手際よく巻き取ると、男の顔は青紫色にひどく腫れ上がっていて、思わず目を背けずにはいられなかった。

どういうわけかその看護師が気になって、様子を目で追いかけていると、彼女の手が突如ピタリと止まった。男の顔をじっと凝視したまましばらく動かない。目が涙で潤んでいるのかと思ったら、すぐに大粒の涙が頬を伝って落ちた。ただただ息を呑んでその光景を見守っていた。彼女はそれから男の頬をそつと手を当て、耳元に口を寄せて何かささやいた。

「イクマ」

その小さな、悲しみを帯びた声は何故かはつきりと聞き取れた。

「あの」

やはり反応がない。忙しなく涙をぬぐっている彼女の肩に思い切っって手を掛けて、

「あの、すみません」と、遠慮がちに言った。

しかし、彼女が振り返ることはついになかった。新しい包帯を巻き終えると、彼女は足早に集中治療室の外へ出て行った。

* * *

病院の屋上で、ただ一人ベンチでぼんやりしていた。

「いい天気やな」

それが自分に投げかけられた言葉だとはまるで気づかず、ぼんやりしている。

「シカトですか」

「あつ、山室さん」

「ご機嫌さん」

「……」

* * *

霧状の雨がやむ気配すらなく、ここ数日降り続いていた。骨の折れた傘を片手にもう一時間近く霞んだ海をぼんやり眺めている。ときどき沖合いをタンカーか何が行き来しているようだった。

「何か面白いもんでも見えまつか？」

「あつ、お帰りなさい」

すぐ後ろに、六十がらみの老人がいつの間にか立っていた。

「水着のおねえちゃんとか」

「いいえ。ほとんど何も。こうガスってちゃあ」

「紛らわしいで」

この老人の言葉にはいつもどこか棘があるのだが、それでいてなぜか温かみを感じずにはいられなかった。

「山室さん」

「改まって何や。怒ったんか」

この老人を山室と呼んでいたが、それは本名ではなかった。初対面のときに、どう呼んだらいいか尋ねると、

「好きなように呼んで」

困惑していると、

「これ何」

茶碗を差し出して、そう言った。

「湯呑みですが」

「そや。呼び名いうんはやはり実態を表すもんでないとあかん」

「はあ。でも、人間はそういうわけには……」

「なんで。髪の毛の薄いのを『ハゲ』とか、力のある人間に纏わりついているのを『腰巾着』とか呼ぶやんか」

「それは悪口じゃ……」

「でも、ありのままの姿を見事に捉えとると思うやけどなあ」

「はあ」

戸惑っていると、

「『屁理屈』とか『へそ曲がり』とか、ほんまに好きなように呼んでくれたらええで」

「それは無理です」

その老人に命を救ってもらったという恩があるし、そのとき以来厄介になっているという義理もあるから、冗談にもそうは呼ぶことに大きな抵抗があった。そのとき、老人が身につけていた作業着に目を移すと、ちょうど胸元に 山室工務店 という刺繍がある。

屁理屈よりマシだ

そのときからこの老人を山室と呼ぶようになった。が、この老人には名前だけでなく、実に謎が多かった。

「今まで色々のご親切にさせていただいて」

「何か思い出したん」

「いえ、まだ。でも……」

「でも、どないしたん？」

「このままご好意に甘え続けるのもどうかと思います」

「そんなん気にするこたないんやで。いや、本来ならあんたのこと、介抱すべきなんやろけど、ほとんど留守居みたいなこと頼んでもつて、むしろ心苦しいくらいや」

「とんでもないです。山室さんが救ってくけなければ、恐らく生

きていたかどうか」

はっきりとした記憶がなかった。真つ暗な港の倉庫街で、複数の男たちから殴る蹴るの暴行を受けていた。地べたにへたり込み、蹲っていた。ぐったりとなつている体を抱え起こされて、胸にナイフの刃先を突きつけられ、

これでおしまいか　と思っただけで、抵抗する気力さえなかった。

と、そのとき、「警察だッ」という叫び声と同時に、赤色燈の明かりが暗闇を照らし、サイレンがけたたましく響き渡った。地べたに放り出され、おぼろげな意識の中で急発進する車の音を聞いた。そのあと誰かが近づいてきて、

「大丈夫か」と体を揺すりながら、そう言った。それが山室であったような気がする。

意識が戻ったのは、海岸に面した高速道路の高架橋下。青のビニールシートとダンボールでできた山室の住maidだった。何日経ったか分からない。その間、自分がどうなっていたか知る術もない。全身に激しい痛みを感じながら、体を起こそうとしていると、外から山室が戻ってきて、

「おはようさん」

それが山室との付き合いのはじまりだった。

山室はホームレスのような暮らしをしていながら、始終忙しそうに出歩いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3666w/>

リンクス

2011年10月9日16時00分発行